【岐阜女子大学】メタデータ項目と記述内容

	メタデータ項目	メタデータ記述欄
1	ID	
2	表題名	沖縄のサトウキビ
3	資料名	製糖記念小公園
4	内容分類	郷土・歴史
5	索引語	沖縄、生活文化、サトウキビ、製糖、西原
6	説明	製糖記念小公園は、平成 23 年 9 月 13 日、新中糖産業㈱（旧 中部製糖㈱）の創立 50 周年記念事業として西原町のサンエー西原シティ前の歩道に設置された。 サンエー西原シティは 1993 年に中部製糖社（現・新中糖産業）が製糖事業から撤退後、1998 年まで翔南製糖が製糖操業を行っていた工場跡地である。製糖記念小公園は、西原町は糖業とゆかりの深い町であるという歴史的足跡を現在に伝える施設であり、設置されている複数の説明板から糖業やその移り変わりについて知ることができる。
7	形式	静止画(jpg)
8	氏名	撮影者：宮田璃音
9	時代・年	撮影日：2025/02/09
１０	地域・場所	〒903-0102 沖縄県中頭郡西原町嘉手苅 117
１１	利用条件	表示 4.0 国際(CC BY 4.0)
１２	関連資料１	
１３	権利者	岐阜女子大学
１４	協力者	
１５	登録日	2025/02/15
１６	登録者	宮田璃音
１７	ファクトデータ	circd087s-0032.jpg
１８	サムネイル	

１９	公開の可否	
２０	＊特色	**①西原町の製糖の歴史** 西原町は肥沃な土壌（アルカリ）に恵まれていることから戦前戦後をとおして、盛んにサトウキビが栽培された。そのため、歴史的にも製糖とのかかわりが深く、明治 41 年（1908 年）字我謝（のちの字兼久 1 番地）に沖縄県臨時糖業改良事務局付属の近代化された工場が設置され、沖縄ではじめての分蜜糖が製造される。 一方、サーターグルマによる製糖も広く普及していたことから大正 3 年（1914 年）西原村字小橋川出身の大城助素氏は従来の鉄製サーターグルマより搾汁効率の高い玉車（ベアリング）式のサーターグルマを開発し、沖縄の製糖技術に一大光明をもたらした。西原村内でも昭和 31 年（1956 年）琉球農業協同組合連合会（琉球農連）第一製糖工場が字嘉手苅に設置され、 昭和 34 年には西原製糖㈱が字小那覇の飛行場跡地に設立される。 その後、昭和 39 年（1964 年）製糖企業合理化により両社は合併し、社名を中部製糖㈱へあらため、第一工場、第二工場の 2 つの工場で分蜜糖を製造した。しかし、第二工場は沖縄本島復帰（昭和 47 年）前後のサトウキビ大幅減産により、昭和 52 年に閉鎖となった。第一工場は、平成 5 年に中・南部 3 社の製糖事業をまとめ引きついだ翔南製糖㈱へ営業権を譲渡した。 翔南製糖㈱が引きついだ第一工場は、工場名は西原工場とあらため、平成 10 年（1998 年）まで製糖をつづけた。昭和 31 年の含蜜糖製造からはじまり西原町のシンボルともなった 2 本の煙突の製糖工場は、43 年にわたる砂糖づくりの役割を終え、ついに平成 11 年 12 月西原町からその姿を消した。 その後、翔南製糖㈱と球陽製糖㈱は平成 27 年（2015 年）の合併により、ゆがふ製糖㈱として再スタートした。 **②現代の与那原・西原地区とサトウキビ** 岐阜女子大学沖縄サテライト校が位置する与那原・西原地区は戦後からサトウキビ産業が盛んでサトウキビの名産地であった。当時は県中南部で最大規模の製糖工場があったほど、サトウキビと深い関係性にあったが、食生活の変化や後継者不足、地域の観光化に伴い、産業である窯業やひじき漁、サトウキビ産業等の一次産業から、飲食など住民向けのサービス産業にかわりつつあるという現状がある。
２１	＊活用支援	
２２	＊利用分野	教育、生涯学習、地域学習、観光
２３	＊改善結果	
２４	＊処理プロセス	
２５	機関外リンク情報	
２６	目標	
２７	紹介	